



塵泥 椿餅

イ 4
2478
201



門 4
號 2478
卷 201

塵
泥

椿
餅

草



塵泥

椿餅



う川不物語国由つり上の巻
 曰大臣己の、序のこより椿餅
 破子三季椿をちるとたきま
 つりたぬし里畧
 源氏物語わらな乃上の巻曰
 云もぬるをりぬく序おろこ

見したぬふつきくの殿上人
ハ其のこよわらうとめしと
いさとなくつとといとある
く柀子やうのそめともさぬ
くふえこのふことにもにり
ませつゝあるとわききく
そわれりくふ畧
難波家記兼元二年十一月十
八日記曰葉形餅与橋菜少く
雪を去器子入く甘葛を霰地

の瓶子子入以有椽裏口被副
置之各爭取云云
松下拾葉曰鞠の庭少く酒あ
る時尔雪を硯の女こに入ろ
春のえしめると尔ハ口り
出をるもあり一鞠場へ可出
物より何分のりた、と法又
いさちこれハ桂の葉少法く
是てのを依るり畧
旧記曰桂餅ハ干版を粉少く

と丁子の粉ををこしくとん
る耳葛おてりさめさ樹の紫
二枚を合をさ法をまて上を
う紙やうの紙をあそきまふ
をうりおきりさるおしおひ
おしくさ法ひしたるいあり公
世二位甲さるハ近傍実自
殿うりたつ色られし小作り
てまいらせきそ色こそやう
ハあれ人これと志ら法と云

畧

或説曰椿餅近代の法干版少
菓有昔ハ砂糖而しハ附ハ
砂糖を入るもてそや法な
る魚し又枝小片葉をつけさ
片葉をハお母くもあり二
葉三葉枝小ほくもあり
耳着乃代ハお市粉を煉り
く粉をうさめむをあり紫に
包むことハ蒸しと暖あり

一 説遊翁事 曰 橋の薬をうり子
てもあくたし加うなるとの
際をもりりせく餅をつ
こたる魚三月のことなれ
ハ梨餅子ふくいなしとれハ
橋乃薬をうり子もなる
しかうの薬あくもは、こ
るるなり
一 説曰 橋餅の造法ハ 南州大
膳蔵子ての製ハ 河海州 蘇
菓

巻あとに出るとハ 正こし
遠るしハ 凡る造菓の法ハ 瓶
甘草の遠めより古法ならん
相まこえんうさり扱分量
習ふくハ
一 説曰 橋の薬に木の病ふく
系化しと丸く餅のことく種
る、物あり是を橋餅と云小
児よりく喰ふ味甚甘し是よ
習いしと橋餅を制し其系

ふ付るしおもハるけま糖乃
こ小阿ら五月小も脚弱餅
とく蒸化しと丸く形餅のこ
堂し是と冷お不其味志おく
耳しと云
一説曰糖餅引版をきつ白色
かしにいり粉おしくきぬふ
るひふりけ白砂糖竹葉ぶく
婦るひ石の粉百目白砂糖百目肉
桂粉拾着合とく手ぶくよく揉

合せくをこし志めりの出こ
る竹小布を水お志めし籠の
内小おき糖もよく蒸梓白お
く右やハらりに成おし法き
糖の言おしにまる女上下糖
の蒸二枚おとさむなり
そし不蒸曰法とい餘糖の蒸
を合と中おて飯のこに耳着
を入と色くのうけやうをき
耳と由ひとるうの也

古實聞書條々

伊勢貞順
記之

曰椿餅の

事よりその色の白黄色みよるに
あつさ三分そり同餅のせ
いハ不定折のと古書物とか
つちちひは折のハが大き
小ハ先下小橋の葉をさ
扱餅を一逆りつそそ橋の葉
をそわいく小あそ又餅一通
をきりハ上すそけ方小つと

戸に折同去器の物小ハ以分
不ハ又食養不モ以分不クハ
又餘をハ養切不モ也ハ桂
の系不存るハ心中ハ惣別為
をハ十月十一月十二月の節
不ハをきハ年の行ハ正月二
月三月中ハ養を飾不仕ハ死
ハ外ハ露を以ハ粒口傳下申
ハ也

憲曰是等ハ法ハ大永年中
將軍家秘中の作法不ハ
市系源氏物語乃文意とハ
そこそくたういもあなれ
ハ徴とをる不たらされと
もたハ因不ハ里と加ハ
忘るハとハハハ

忠憲曰細流云つていふ事
み鞠場も用ゐる事なり云
云河海抄云橘餅ハ橘の葉
小法、こゝるなり云北
村季吟説云橘の葉をみハ
せくそちの粉も甘着を
うけつゝみゝる事のを
鞠の口ころも食する也
云憲原氏物語の文も有り

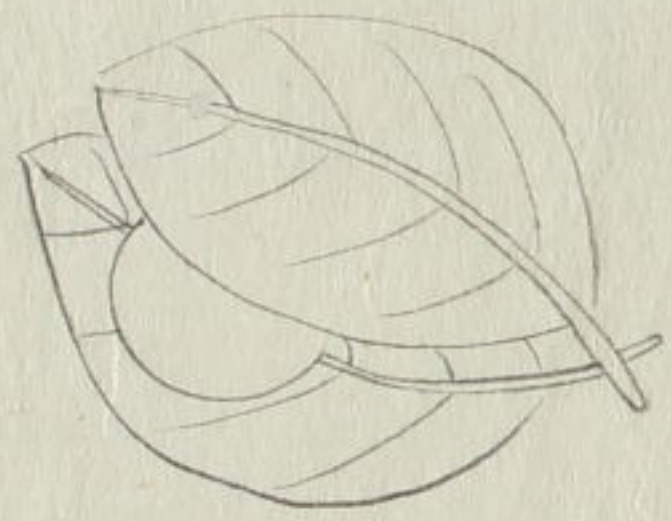
予考るにやふひをうり
うらしむるにありに
ハ橋ハ難題ハ出テ八千世
を産する色ありそらぬこと
を祝ふよりある一万余集
おハつらくつとき法らく
おし弁おハむるれとも
至樹ハ表に西く花咲くを
のるれハ時表に志こりい
そまをもろつこころ餅

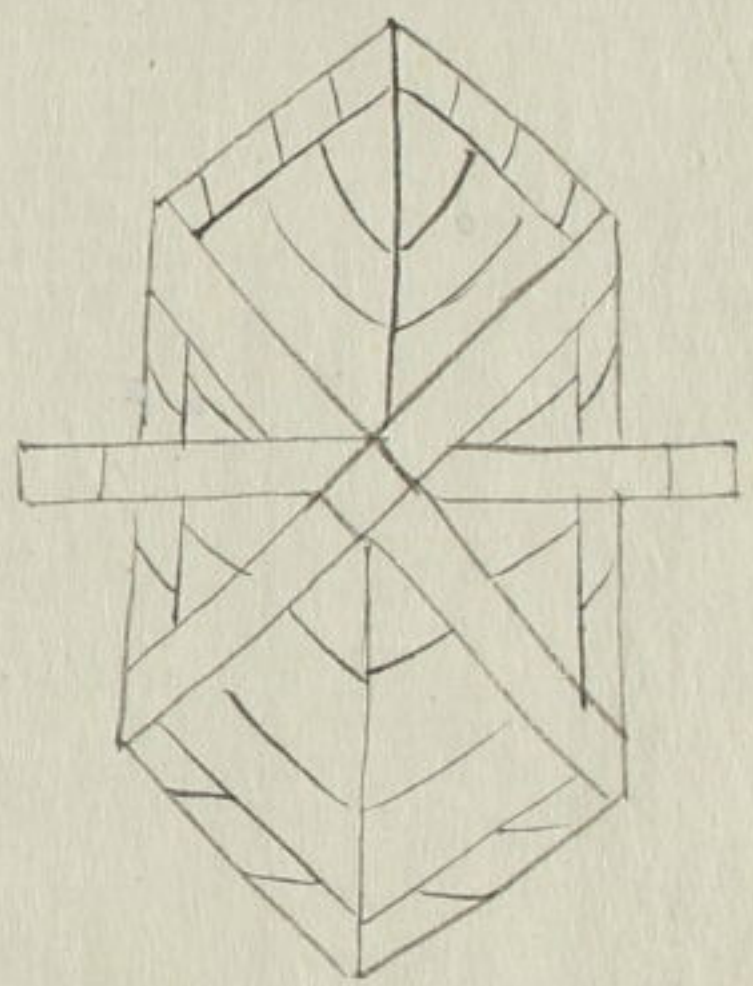
と佳餅と号しと粉鞠の管
おふれろそ産おハ出され
とるそのなる屋一あるり
ち佳餅ハ鞠の折のこ出
果子とさしさとまりとる
おハ何らさるおや五秋
の鞠の産おも管おぬれ
ハ勝勝を制し出しくも教
てるたりぬるとさるも
るこおもあらを今の世

俗小楳餅を齧物の症小き
とわさく如きこと有り
或部のおうさるる右紫
と小やあるらんたしうな
るちり口とるもきこえは
今奥に享保年中子日御持
の國中小ある楳餅の形物
其能一二の圖とを合と画

き多後考のむとつのだよ
アといなるんたしぬ

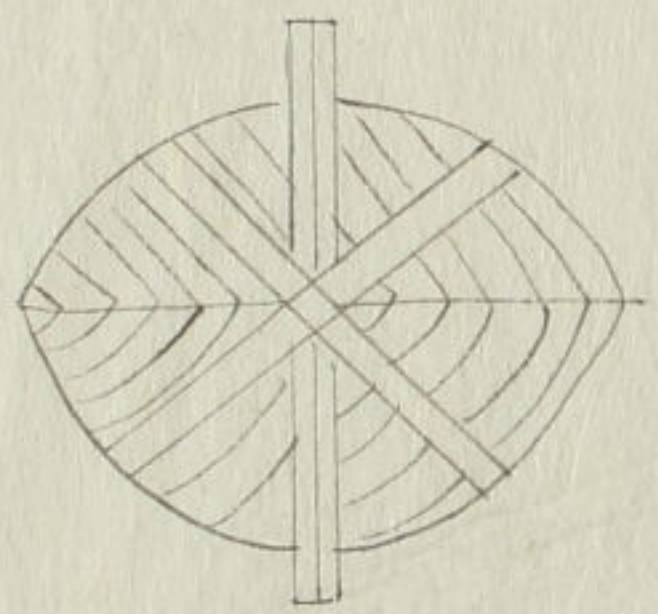
享保十二年御再興子日御遊
之圖ニ 昼ルトコノ
形如左 橋餘ノ





右ハ或書に載るる桂餅の図
 ありこハ桂の葉ニそのうち
 に餅を裹て白き薄紙の紙を
 細く裁ち如右様ハ但此の
 作り異なること長さをおよそ二

寸とありと云ふ



右ハ遊翁宗川の図をるるこ
 ろるり

文化四年の十一月

本多甲馬忠憲



同五辰年以神戸屋書

傳寫年

藤井傳

右文政六年壬午後於燈之有傳寫之年
吉原新井史家

